

【令和7年度 中学部の実践】

1 今年度の重点

中学部では、子ども一人一人が今の自分として実感している学び(『自分なりの学び(自分なりに意味を見出していること・もの)』や『納得感のあること・もの』)と教える側の教師がこれからの発達として期待する姿に迫るための学び(体験)をつなげ、体験を蓄積し、子ども自身の内面において、体験が経験へと昇華され、思いや物事への向き合い方や捉え方が変化する(内面が成長する)ことを目指す。

そこで、学部研究の方向性としては、

- ① 環境要因の後押し(自分なりにつなげて考えられたことを見える化し、他者(仲間や教師)と共同保有すること)
- ② 『思いや物事への向き合い方・捉え方の変化』を目指した授業づくり

上記の2点を重点として、授業づくりを行うこととした。

2 中学部の取組

(1) 事例生徒Bについての子ども理解(認知特性とそれを踏まえた支援と配慮)

① 興味・関心・意欲

【得意】

- ・後先(目的)ではなく、「今、ここ」に注目する
- ・見たこと聴いたことをそのまま捉え、一つずつ処理する
- ・見たこと聴いたことをそのまま覚える

【不得意】

- ・自分の思考や感情を客観的に把握し、コントロールする(セルフモニタリング)
- ・状況や目標に応じて自分の行動を組み立て、実行する
- ・自分の行動やその成果を自分で確認・評価する(メタ認知)
- ・複数の指示や情報を同時に処理する

② 人間関係・コミュニケーション

【得意】

- ・相手の言葉や表情をそのまま捉えて覚える
- ・新しい物事に対して抵抗なく受け入れて覚える
- ・見たことから大まかな状況を表面的に察する
- ・日常的な言葉を用いて表面的に表現する

【不得意】

- ・自分の意見や考えを文章として組み立てる
- ・言葉の意味を理解する
- ・行動や発言から相手の意図や気持ちを読み取る
- ・状況や文脈からこれから起こることや相手の行動を推測する。

③ 本人の得意や強みを生かした支援と苦手や弱さを補う配慮事項

【日常生活場面】

ア 支援

- ・役割を与え、一連のパターンで体験させ、やるべきことを3~4つ程度明確にする。覚えたら自分で選択できるようにする。
- ・役割に関するやり方や進め方をマニュアル化し、自分で見て確認しながら進められるようにする。(指示は分かりやすく簡潔に)
- ・役割を意図的にペア活動やグループ活動にして一連の体験を共有する。
- ・学習や学習集団の目的は、役割に取り組んだ結果としてつなげる。(目的に対する目標設定はしない)
- ・指示や依頼をするときは、経緯や流れを説明した上で(文脈を伝えながら)理由や背景が分

かるように指示や依頼を与える。

- ・自分が思ったようにできなかったときやうまくいかなかったときなどのストレス対処行動をパターン化する。

イ 配慮

- ・役割に取り組んだ成果を見える化する。
- ・できたところを認め、具体的な行動としてほめる。(できたことを他者から評価される喜びにつなげ、「どうやったら人にほめられるのか」への気付きを促す)
- ・本人と活動や体験を共有する中で、側にいる教師が気持ちや感情を表情やしぐさ(態度)で分かりやすく本人に伝え、「できた」や「やった」を共有したり、教師がタイムリーにそのときの気持ちにふさわしい言葉を伝えたり(代弁したり)するやりとりをする。(いろいろな気持ちの言葉を投げ掛けていく)
- ・本人が発する言葉の意味を探る。(好きや楽しいなどの気持ちと言動を整理する)

(2)授業実践① (美術科)

| | |
|-------|---|
| 単元名 | オリジナルぎんなんくんを創ろう |
| 学習集団 | 中学部1年生(男子5名) |
| 単元目標 | <ul style="list-style-type: none">・水彩絵の具を使った技法や様々な描画材料(ローラー、スポンジ、ビー玉等)を使った表し方が分かり、それらを使ってぎんなんくんの色や模様を表現することができる。【知・技】・こうしたいという思いをもって色や技法を選び表現したり、作品の色や模様に着目し、気付いたことを言葉で表現したりすることができる。【思・判・表】・表現することや作品から感じ取ることの楽しさや面白さを味わい、表現活動や鑑賞活動に自ら関わろうとすることができる。【学びに向かう力】 |
| 評価規準※ | <ul style="list-style-type: none">・水彩絵の具を使った技法や描画材料の扱い方が分かり、表現している。(知識)・様々な技法や描画材料に慣れ親しみ、表現活動に生かしている。(技能)・色や描画材料、技法を選び、表現している。・作品の色や表現の面白さに気付き、「もっとこうしたい。」「次はこうしよう。」という思いを伝えている。(思考力・判断力・表現力)・表現活動に自ら関わり、表現することを楽しもうとしている。・作品から感じ取ったことを自分の言葉で伝えようとしている。(学びに向かう力) |

※評価規準:美術I段階 A表現(ア)、B鑑賞(イ)、共通事項(イ)

【単元について】

これまでに絵の具を使った学習や遊びの経験を重ねてきた生徒たちは、絵の具を使った創作活動への興味関心が高く、自分の好みの色や得意な表現方法を持っている。絵の具と紙を用意すると、手足を使ってダイナミックに表現する生徒や、絵の具を混ぜて色の変化を楽しむ生徒など、習得してきた知識や技能を使って表現することができる。一方で、選ぶ色や表現方法については、好みのものや経験したことのあるやり方に限られており、色合いや表現がパターン化してきている。また、作品の鑑賞を通して、感じ取ったことを伝えたり、表現の面白さに気付き、「次はこうしてみよう。」という思いをもって、作品に取り入れたりすることは難しく、自分の表現や感じ方を広げる段階には至っていない。

そこで、本単元では、「オリジナルぎんなんくんを創ろう」をテーマに、ぎんなんくん(本校高等部卒業生が創作したマスコットキャラクター)と様々な素材写真(花火・すいか・海など)を掛け合わせたオンリーワンのぎんなんくんを創る活動に取り組む。興味のある絵の具と本校のマスコットキャラクターである「ぎんなんくん」を題材にした創作活動を通して、「こんなぎんなんくんにしたい。」という思いをもち、水彩絵の具の技法や様々な描画材料を使って表現する姿を引き出していきたい。また、自分や仲間の作品の鑑賞活動を通して、色や表現の面白さに気付き、「こういう表現の作品もいいな。」「〇〇の技法はおもしろいな。」「次は〇〇を使ってみたい。」といった新たな思いを巡らせ、これまでとは違った色や表現方法を試みようとする姿を引き出していきたい。

【本人の得意や強みを生かした支援と苦手や弱さを補う配慮事項】

ア 支援

- ・一つ一つの技法のやり方をマニュアル化して覚える。
- ・いくつかの技法をパターンとして覚える。
- ・「〇〇みたいになりたい」、「△△風にしたい」などの具体的なイメージが見て分かるように、技法を使った表現方法を例示する。
- ・技能面に対しては、経緯や理由を説明しながらアドバイスをする。
- ・思ったようにいかなかったり、うまくいかなかったりしたときの対処方法をあらかじめ決めておく。

イ 配慮

- ・自分の学習（制作）の成果を見える化し、見比べることができるようにする。
- ・本人が「頑張った」と実感をもっているところや「本人らしさ」があらわれている部分を認め、ほめる。
- ・近くで教師がともに制作し、そのときの気持ちや感情を教師が表情やしぐさ（態度）で分かりやすく本人に伝え、「できた」や「やった」を共有したり、教師が自分を主語にしてタイムリーにそのときの気持ちにふさわしい言葉を伝えたり（代弁したり）するやりとりをする。

【単元における事例生徒 B への具体的なアプローチ】

| | |
|--|--|
| 自分なりの学び (本人が意味を見い出していること・もの) | <ul style="list-style-type: none"> ・教師のやり方を見て、同じようにやってみたい ・手本となる写真やイラストを見て、同じ色や形になるように描きたい |
| 納得感のあること・もの (頑張ってきたこと・自信をもってできること) | <ul style="list-style-type: none"> ・慣れた道具や技法を使って描きたい ・興味のあるものを描きたい |
| 本人のあこがれの姿 (本人の思いや願い) | <ul style="list-style-type: none"> ・手本通りに自分の好きなものを描きたい |
| 教師側の期待する姿 | <ul style="list-style-type: none"> ・「もっと〇〇したい」、「△△をしてみたい」という思いをもち、さまざまな色や技法を使って表現する姿 |
| 予想される自分なりの思考 (自分の思いや願いを元にしながら、環境からの働き掛けに対してどんなことを思い、何を考えるか) | <ul style="list-style-type: none"> ・自分はこれを描こう ・手本通りにきちんと描こう ・自分が決めたやり方で描きたい ・教師や仲間のやり方をまねしてやってみよう |
| 教師側の期待する姿と自分なりの思考とのギャップに対するアプローチ (支援と配慮) | <p>【支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・得意な数学的思考を取り入れ、ぎんなんくんと様々な素材写真(花火・すいか・海など)を掛け合わせたオンリーワンのぎんなんくんを創る活動を設定する。 ・興味のある素材写真(線路、すいか、花火)を提示する。 ・どの道具でどのような表現ができるのか分かるように、技法の名前と使う道具、模様を示したものを掲示する。 ・思ったようにいかなかったり、うまくいかなかったりしたときには、経緯や理由を説明しながらアドバイスをする。 ・描きたい模様や色を探す場面で、どんな色や技法が使えるか尋ねたり、提案したりする。 <p>【配慮】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習活動のゴールや進捗状況、目的などを目で見て確認できるように、学習の流れ(①写真を選ぶ ②表現する ③いいねポイントを書く)ゴール(ぎんなんくんの枠と目と口を貼ったら終わり)を掲示し、見える化する。 ・過去の作品を綴っておき、今の表現と過去の表現を見比べることができるようにする。 ・制作中のつぶやきを教師が付箋に書いて見える化し、本人が「頑 |

張った」と実感をもっているところや「本人らしさ」があらわれている部分を認め、ほめる。
 ・近くで教師がともに制作し、そのときの気持ちや感情を教師が表情やしぐさ(態度)で分かりやすく本人に伝え、「できた」や「やった」を共有したり、教師がタイムリーにそのときの気持ちにふさわしい言葉を伝えたり(代弁したり)するやりとりをする。

【事例生徒 B の内面 (思いや物事への向き合い方・捉え方) の変容】

学習の様子

綿棒を筆代わりにして描く

技法の見える化

制作中のつぶやきの見える化

4 回目の制作

複数の色や技法を使って「線路」を描く

学習中の変容

- ・ 1 回目の制作では、夏休みの日記に書かれていた「すいか」の写真素材として選んだ。道具置き場にあるローラー、タンポ、気泡緩衝材、綿棒(点描)、網とブラシ(スパッタリング)、ビー玉(ドリッピング)の中から、綿棒を選び、綿棒の先に絵の具を付けて筆のように動かして、すいかを描いていた。また、色についても、写真通りの赤と緑を使って忠実に再現していた。目で見たものを同じように描きたいという思いが見られた一方で、筆のように扱えない他の道具への興味が薄いことが分かった。
- ・ 2 回目の制作では、夏休みの日記に書かれていた「花火」の写真を選んだ。道具置き場には、複数の道具を用意していたが、やはり綿棒を選び、筆のように使って花火の線を描いていた。他の道具にも目を向けるため、ビー玉を使った描き方を紹介するが、「綿棒で大丈夫。」と言って、チャレンジすることはなかった。この日は、花火の色に注目し、いろいろな色を使って線を描き、画用紙の上で複数の線が重なると「色が混ざってきれい。」と言っていた。筆を使って絵を描くことは、これまでに何度も経験してきているが、今回のように筆以外の道具を使って描くという経験は初めてであることが予想される。今、使えると感じている綿棒を手掛かりに、新たな知識として「点描」の技法を教える必要があると感じた。
- ・ 3 回目の制作では、数日前の天候に見られた「雷」の写真を選んだ。道具に綿棒を選ぶことが予想されたため、授業の導入で、綿棒やタンポを使った点描の技法を使った線の描き方を実演して示した。太さの異なる綿棒を用意したことで、複数の綿棒を使い分け、「ここは、細い線。」と言いながら、点描の技法を使って雷の線を表現することができた。鑑賞の場面では、「点描で描きました。」と満足そうに伝えていた。複数の稲妻を点描の技法で描くという体験を通して、点をつなげて線を描き、思い通りの形が表現できることに気付くことができた。
- ・ 4 回目の制作では、大好きな「線路」の写真を選んだ。前時では、教師の実演や模様

| | |
|-------------|--|
| | <p>の例示が表現の広がりにつながったため、この日は、授業の導入で、複数の技法を使った描き方（合わせ技）の紹介をした。制作を始めると、前時と同様にタンポに赤い絵の具を付け、点描の技法で線路の太い線を描いた。その後、道具置き場から網とブラシを手に取り、スパッタリングの技法で、線路の敷石を表現していく。その後、紫色に色を変え、ローラーを使って横線を描き始めた。さらに、ビー玉に黄色い絵に具を付け、転がして横線を延ばしていくが、やはり思い通りに横線を描くのは難しいことに気付く。最後に、タンポに白い絵の具を付け、点描の技法を使って、横線を長めに描き仕上げた。これまでは、綿棒を使った点描へのこだわりが強く、広がりは見られなかったが、今回は、これまで苦手としていたビー玉を使ったドリッピングやスパッタリングにも自ら手を伸ばし、線路を描いていた。これは、本人の納得感のあるものである「線路」を題材にしたことで、「こうしたい。」という思いが強く表れた姿であると言える。</p> |
| 単元を通した変容の要因 | <p>見た物を見た通りに描くことは得意であるが、今回のように、筆以外の道具を使い、自由に表現することは苦手であった。その中でも、「綿棒を使いたい。」という思いを抱き、4回目にして、同じ技法ではなく、いつもと違う技法を取り入れるという変容が見られた。その要因について考察する。</p> <p>今回の制作活動では、本人が今「意味を見出せていること・ものや納得感のあること・もの」（好きや得意等の強み）に目を向け、「花火」や「線路」など、興味がありそうなものを素材写真として扱った。また、制作中は、無理に教師側の思いに寄せるのではなく、本人の「やりたい。」に寄り添い、アドバイスをするように心掛けた。始めは、写真と同じように描きたいという思いが強く、様々な技法に興味を示さなかったが、綿棒に興味をもち始めたことをきっかけに、綿棒を使った点描のやり方を実演し、できた模様を素材写真とともに提示したことで、技法を受け入れ、「点描」にチャレンジすることもできた。</p> <p>このような関わりにより、制作活動に対する思いや向き合い方を変化させることができたと考えられる。</p> |

(3)授業実践② (作業学習)

| | |
|-----------|---|
| 単元名 | ハッピースマイルガーデンプロジェクト！ |
| 学習集団 | 中学部園芸班（1年生3名、2年生3名、3年生2名 計8名） |
| 単元目標 | <ul style="list-style-type: none"> 花を使った製品作りやプレゼントをする活動において、自分の役割が分かり、仲間とできた喜びを分かち合うとともに、仲間との関わりの中で、周りの人を笑顔にするために進んで活動に取り組むことができる。 |
| 評価規準 ※ | <ul style="list-style-type: none"> 花の扱い方が分かり、茎の長さをそろえたり、花弁を優しく取ったりしている。 プレゼントをする相手や自分のすべきことが分かり、製品作りに取り組んでいる。(知識・技能) 自分やチームで決めた目標(人を笑顔にするための言動)につながる行動や発言をしている。 自分や仲間の頑張りに気付き、周りの人に伝えている。(思考力・判断力・表現力) みんなを笑顔にしようという気持ちで、仲間と一緒に取り組んでいる。 たくさんの人を笑顔にできた喜びを仲間と分かち合い、気持ちを言葉で伝えている。 「プレゼントをしたい。」「人に喜んでもらいたい。」という思いをもち、自分から進んで活動に取り組んでいる。(学びに向かう力) |

※評価規準：職業・家庭科2段階 職業分野A職業生活 ア働くことの意義

【単元について】

園芸班では、「花や野菜で人を笑顔にする」ことを大きな目的にしながら、花や野菜の栽培や収穫、プレゼントに取り組んでいる。前単元である6月から9月にかけては、「学校の花壇をきれいにして、学校に来る人を笑顔にする」ことを目的として、花の栽培や手入れに取り組んだ。「ハッピーフラワーガーデン」と名付け、黄色いメランポジウムが咲き誇る花壇を作ることができた一方で、花壇を見た人の笑顔や声が届きにくい。そこで、本単元では、「もっとたくさんの人を笑顔にしよう」を目的に、「ハッピーフ

「フラワーガーデンプロジェクト」と題して、花や花を使った製品（フラワーフレーム）をプレゼントする活動を設定した。

本単元では、栽培→収穫→加工→プレゼントをできる限り短い間隔で繰り返すことで、自分の作業による自分や他者の気持ちの変化に気付くことや、他者からの要望に対して積極的な姿勢で作業に取り組むことをねらいとしている。これにより、勤労の意義に気付いたり、自分の行動や役割に作業的価値や意味を感じやすくなったりして、主体的、協働的に作業に取り組めるようになると考えた。

主な題材として「花」を取り扱うことで、収穫を常時活動に取り入れられるため、活動の見通しや作業工程の定着がしやすい。また、プレゼントするだけでなく、枯れたときに新しい花と交換するなどの活動が自然な文脈の中で発生し、活動の必然性の高まりや内発的動機付けによる主体的な学びの姿が期待できると考えた。

本単元では、自分と他者とを関わらせることにより、「人を喜ばせたい」という自身の内面に気付き、「自分の作業活動により他者に喜びを与えた」という体験を積み重ねて経験に昇華させていくことで、個々の内面の成長を促したり、支えたりすることができると考えた。

「フラワーフレーム」と「花」のプレゼント



【本人の得意や強みを生かした支援と苦手や弱さを補う配慮事項】

ア 支援

- ・プレゼントを渡す相手や活動の流れが一目で分かるように、ボードに写真やイラストで示す。
- ・「花の準備→プレゼント→喜んでもらえた（ばくも嬉しい）」までの一連の流れをパッケージにして繰り返す。
- ・仲間の良い発言や行動に気付いて模倣できるように、チームやペア活動を設定し、近くで一緒に活動する。
- ・花を摘み取る長さや剪定する長さが分かる補助具を用意する。
- ・茎の長さが短くなってしまったときには失敗とせず、花を摘んで、フラワーフレームチームに届けるように促す。

イ 配慮

- ・喜んでもらえた体験が残るように、プレゼントをしたときの笑顔の写真をボードに貼る。
- ・みんなを笑顔にするための具体的な言動が見られたときには、「今の〇〇は、協力だね。」などと、その場で本人の言動を言語化して伝え、その言動を褒める。
- ・目標に向けて何をすべきかを考えることは難しいため、何をすべきか問うのではなく、「プレゼントをして喜んでもらえた。」「協力したら先生や仲間に褒めてもらえた。」という体験を重ね、本人の言動が目標につながっていることを教師が意味付けする。
- ・「〇〇先生に渡したい。」など、本人の思いが強くなることを活動の目的とする。

【単元における事例生徒 B への具体的なアプローチ】

| | |
|---|--|
| <p>自分なりの学び (本人が意味を見出していること・もの)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・プレゼントをした相手に「ありがとう。」と言ってもらいたい。 ・仲間を助けて先生に褒められたい。 ・仲間に認めてもらいたい。 |
| <p>納得感のあること・もの (頑張ってきたこと・自信をもってできること)</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・長さや本数を守ってきれいに作りたい。 ・自分の役割を果たしたい。 |

| | |
|--|---|
| 本人のあこがれの姿 (本人の思いや願い) | <ul style="list-style-type: none"> ・人を笑顔にしたい、喜んでもらいたい ・仲間を助けて先生に褒められたい。 |
| 教師側の期待する姿 | <ul style="list-style-type: none"> ・相手に喜んでもらいたいという思いをもって丁寧に取り組む姿 ・チームの仲間と協力する姿 |
| 予想される自分なりの思考 (自分の思いや願いを元にしながら、環境からの働き掛けに対してどんなことを思い、何を考えるか) | <ul style="list-style-type: none"> ・たくさん作って、たくさん褒められたい。 ・仲間と一緒にやろう。 ・仲間に「ありがとう。」「助かったよ。」と言ってもらいたいな。 ・花を渡した人から「ありがとう。」「うれしい。」と感謝されたい。 ・先生に「今の良かったね。」と褒められたい。 |
| 教師側の期待する姿と自分なりの思考とのギャップに対するアプローチ (支援と配慮) | <p>【支援】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・準備からプレゼントまでの流れが時間内に完結するように、プレゼントをする花の数を調整する。その日に渡す数を担当表に枠で示す。 ・褒められている仲間に目が向きやすいため、目標に結び付く仲間の良い言動が見られたときにはすぐに褒め、言動の意味を言葉で伝える。 <p>【配慮】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の気持ちに気付くことは難しいため、仲間が困っているから手伝おうとはなりにくい。 ・本人の言動に応じて、どのような状況でどんな言動をすることが『協力』かを伝え、協力につながる言動をパターンとして覚え、協力につながる言動のバリエーションを増やす。 ・小さな物を2人で持つ(=協力)など、場に合わない行動であっても、本人なりに考えて行動できたことを一度は認め、『協力』と『余計なお世話』の線引きを明確にして伝える。 |

【事例生徒Bの内面(思いや物事への向き合い方・捉え方)の変容】

★園芸班で考えた「みんなを笑顔にする力」
協力・ **笑顔にしたい気持ち**・ **たくさん**・ **やり方を守る**・ **丁寧に**

学習の様子

長さをそろえたい!

★丁寧に ★やり方を守る

枯れちゃったら、ぼくが交換します。

★笑顔にしたい

大きな花瓶に入れてほしいな。

わかりました。

もっとたくさんの人に喜んでもらいたい。

★たくさん ★協力

| | |
|---------------|---|
| <p>学習中の変容</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・花壇の整備をしながら、校内の先生に花をプレゼントする活動に取り組む。A先生に花を渡したいという思いを抱き、花の長さをそろえてきれいに作ることにこだわって作る。「ぼくが、作りました。」と言って花を渡し、喜んでもらったことを実感した。花をプレゼントして、相手を「笑顔にしたい気持ち」が少しずつ芽生えてきた。 ・次に、自分事から自分たち事への広がりや花の管理に目を向けるため、支援の検討を行い、花瓶に「園芸班で作りました。」というメッセージと担当者名を書いた札を付けるようにした。担当制にしたことで、もっといろいろな人に渡したいという気持ちが強くなり、花を渡すときにも「園芸班で作りました。枯れちゃったときには、ぼくが交換します。」と伝えるようになった。また、「大きな花瓶にしてほしい。」「他の花もほしい。」など、相手の要望を聞いて、終わりのミーティングで報告するようになった。聞いたことをみんなに伝えようという気持ちの表れであり、園芸班の仲間への気付きが見られた。また、花を渡すと自分も相手も笑顔になる、笑顔の写真が増えていくという経験を積み重ねることで、もっとたくさんの人を笑顔にしたという思いを抱くようになった。 ・単元の中盤からは、「もっとたくさんの人を笑顔にしたい」という思いから、花をプレゼントするチーム（4人）と花卉を使ったフラワーフレームを作るチーム（4人）に分かれて活動に取り組む。最初のチームミーティングで「今日は〇個作って、〇〇先生に花を届けよう。」という目標を立てるが、時間内に決めた数の花を作って届けることができなかった。スピードアップにつながる言動を教師が見取り、具体的な姿や言動を写真や言葉で意味付けし、「みんなを笑顔にする力」を示したボードに具体的な言動を書いて残していくことで、「たくさん」作るには、仲間との「協力」が必要であることに気付き始める。 <p>この頃から、日誌の目標には、「協力したい。」という言葉が多く見られるようになった。仲間の存在に気付けるように、ペアで一つの花を作るようにすると、花を長く切るのが難しい仲間の存在に気付き、「長いのはぼくが切るよ。」と伝えたり、太い茎を切るのが難しい仲間に「ぼくが切るから、花瓶に入れて。」と伝えたりする様子が見られるようになった。日誌による振り返りでは、「〇〇さんと一緒に作りました。」「〇〇さんを手伝いました。」などと発言するようになった。</p> |
| <p>学習後の変容</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・次の作業販売に向けた単元では、切り干し大根とさつまいもチップスの販売に向けて、ポップの制作やロゴのデザイン、看板作りに取り組んだ。店作りチームとして準備を進める中で、日誌には、「来てくれたお客さんに買ってもらいたい。」「喜んでもらいたい。」「きれいに作りたい。」という言葉が多く出てくるようになった。今回は、初めての販売会であり、見通しがもてない状況であったが、これは、花をプレゼントして喜んでもらった、たくさんの人を笑顔にできたという経験からの学びであると言える。 ・販売会が近づいてきた頃、突然、「買ってくれたお客さんにレシピカードを作りたい。」と伝えてきた。その理由を聞くと、「たくさん買ってほしいから。」「お客さんに笑顔になってもらいたいから。」と話していた。切り干し大根の煮物やさつまいもチップスサラダなどおすすめレシピをパソコンで調べると、材料や作り方を打ち込み、写真を取り込んでカードを作成した。さらには、「しゃきしゃきしておいしいよ。」など、自分で考えた一言メッセージも添えていた。販売当日は、買ってくれたお客さん一人一人に「作ってみてください。」と言葉を添えてカードを渡していた。 ・作業学習を中心に、子どもたちの言動に対し、「〇〇をするとみんなも嬉しい。笑顔になる。」という意味付けを繰り返してきたことで、自分以外の他者の存在に注意を向けることができた。それは、『人を笑顔にする力』にある「協力」（手伝う、助ける、一緒に、相談する）という言動につながった。また、『人を笑顔にする力』にある「人を笑顔にする気持ち」に本人なりの価値を見出し、「（花を渡すと）先生もうれC」「（レシピカードを渡すと）お客さんもうれC」（喜んでもらいたい）」というように、相手の嬉しい気持ちや笑顔につながる言動が見られるようになった。 |

(4)生活への広がり（有効なアプローチを日常生活につなげ、学びの蓄積を促す）

事例生徒が今の自分として「意味を見出せていること・ものや納得感のあること・もの」（好きや得意等の強み）を生かした活動内容や役割を設定し、他者（教師や仲間）との対人的な関わりにおいて、『できた/できなかった』の正解・不正解の評価ではなく、『できたこと（本人の頑張り）や言動が周りの人にどのような影響を与えたのか』という観点で意味付けするアプローチ（やりとり）を大切にした。

【日常生活場面でのエピソード】

エピソード1 〈お手伝い係〉

・クラスでは、自発的な言動を増やしたい」という教師の願いから、3学期から「お手伝い係」という係活動を新設した。係決めでは、「予定係をやりたい。」と主張し、「お手伝い係」に興味を示さなかったが、「3学期は、2つの係に挑戦してみよう。」と伝え、渋々、「お手伝い係もやろうかな。」といった様子であった。その後、クラス全体に関わる仕事ができるときに「お手伝い係の人、お願いします。」と依頼をするが、「外に行きたいので、休み時間が終わったらやります。」と言い、もう一人のお手伝い係である生徒Cに任せることもあった。これは、支援者が思い描いている自発的な言動とは程遠い姿であった。ある朝、お手伝い係の生徒Cは、教師から依頼された写真を切る仕事に取り組んでいた。いつものように着替えから戻ってくると、事例生徒Bは生徒Cに対し、「お手伝い係なので、手伝うことはありませんか。」と話し掛けた。生徒Cは「お願いします。」と応じ、手元に残っていた仕事を生徒Bに手渡した。杣に沿って丁寧に写真を切り抜き、近くにいた教師に「できました。」と伝えた。

エピソード2 〈委員会〉

・役員会として、ビオトープの水温管理を担当し、毎朝、登校後に水温を計り、記録表に記入した。朝の支度は自分のペースで取り組む傾向にあったが、役割が決まってからは、「早く水温を計りたい」という思いが勝り、取り組む速さが変わった。着替えを終えて教室に戻ると、「水温を計りに行ってきます。」と元気に報告してからビオトープに向かっていく。毎朝、欠かさずに自ら取り組むことができた。

エピソード3 〈年賀状〉

・新年を迎え、3学期の始業式の日であった。「みんなに渡したいものがある。」と担任に伝え、たくさんの封筒をかばんから出した。それは、手紙であった。手紙は、中学部14人の仲間に加え、中学部に関わりのある教師の分まで用意されており、その内容も、一人一人に合わせたものであった。これまでになかった出来事であったため、手紙を書いてきた理由を尋ねると、「書きたかったから。みんなに渡したいと思ったから。」と答えた。始業式を終えると、一人一人に手紙を手渡し、やりとりを楽しむ様子が見られた。すべての手紙を渡し終えて教室に戻ったときの表情は、達成感に満ちていた。

エピソード4 〈長距離走の練習〉

・城北公園で長距離走の練習をしているときのことである。何度か練習を重ね、先頭集団に付いていこうと必死に走っていた。途中、諦めそうになりながらも7周を走り切り、この日は初めて目標にしていた18分をきることができた。ペースメーカーであった教師がその理由を聞くと、「臨済時前のバス停が応援してくれたから。」と答えた。

エピソード5 〈学級活動〉

・1年間のまとめの学習の一環で、1年間の授業や行事を振り返りながら、「どんな2年生になりたいか。」と投げ掛け、思いつくままに書くようにした。ワークシートには、迷うことなく、「生徒会副会長になってみんなにあれこれを教えてあげます。」「これをやったらうれCを教えていきます。」と書いていた。

【エピソードの考察】

エピソード1と2については、本人が今の自分として「意味を見出していること・ものや納得感のあること・もの」（好きや得意等の強み）である「はさみを使って切ること」「水温計を使って計ること」を役割（係活動や委員会活動）として任せたことで、「やりたい」という思いが自然な形で引き出され、このような自発的な言動につながったと考えられる。

また、エピソード3～5については、他者の存在や気持ちに目を向けた言動であり、「相手にも笑顔になってもらいたい」という思いが垣間見られる。これは、作業学習における「（先生に）花を渡したら、喜んでもらえた」という体験がきっかけになっていると推測できる。日常生活場面で同様の体験を蓄積していくには、本人が意味を見出し、自信をもって取り組んでいる場面で、他者（教師や仲間）の共感的な関わりと対話を大切にし、体験として積み重ねていく必要があると言える。

「みんなにあれこれを教えてあげたい」という2年生に向けた思いは、花をプレゼントしたときの「ぼくもうれしいし、みんなもうれしい」という体験が少しずつ経験へと昇華されてきている表れであると捉えることができるだろう。

3 まとめと次年度に向けて

今年度の学部研究では、昨年度の研究から見えてきた①環境要因の後押し（自分なりにつなげて考えられたことを見える化し、他者（仲間や教師）と共同保有すること）②『思いや物事への向き合い方・捉え方の変化』を目指した授業づくりに重点を置いて取り組んできた。

①環境要因の後押し（自分なりにつなげて考えられたことを見える化し、他者（仲間や教師）と共同保有すること）については、昨年度に引き続き、一人一人にサポートブックを作成し、「自分」について考えたり、目標を立てたり、振り返りをしたりするためのツールとして、様々な場面で活用してきた。この取り組みについては2年目となり、教員間で共通理解を図り、学部の取組として定着してきた。学習者である子どもたちにとっては、あこがれの姿を明確にすることによって、具体的に取り組む活動や行動が明確になり、今何をすべきか、何をしたいかが分かり、取り組みやすくなった。また、教える側である教師にとっても、その生徒が取り組むべきことや段階が分かり、言葉掛けや指導が明確になった。次年度についても引き続きサポートブックの作成と更新を行い、後の学習での目標決めや保護者面談での活用へと広げ、子どもたちが学校生活において価値を置いている『思いや願い』をより多くの人と共有していけるようにしたい。

②『思いや物事への向き合い方・捉え方の変化』を目指した授業づくりについては、下記の3点を押さえた授業づくりに取り組み、学部の教員で事例生徒へのアプローチを検討し、実践を積み重ねてきた。

【『思いや物事への向き合い方・捉え方の変化』を目指した授業づくりのポイント】

- | |
|--|
| <p>① 今の自分として実感している学び（意味あること）を生かした活動設定と支援の検討 【自分なりの学び（自分なりに意味を見出していること・もの） 【納得感のあるもの・こと（自分なりに頑張ってきたこと・努力してきたこと・自信をもってできること）】</p> <p>② 学びの見える化（学習活動のゴールや進捗状況、目的などを目で見確認できるようにする）</p> <p>③ 他者（教師や仲間）との共感的な関わりと対話（意味付けと価値付け）</p> |
|--|

前期の授業づくり（美術科）では、授業づくりのポイント①に重きを置き、【自分なりの学び（自分なりに意味を見出していること・もの）】【納得感のあるもの・こと（自分なりに頑張ってきたこと・努力してきたこと・自信をもってできること）】を学習活動に取り入れ、本人の思いや願いに寄り添い、共感的な関わりと対話を重ねた。また、教師の期待する姿に無理に寄せるのではなく、子どもの文脈に沿って具体的な技法を提示していくことで、生徒の制作活動への思いや向き合い方、捉え方を変化させることができた。以上のことから、子どもたちの「思いや物事への向き合い方、捉え方

変化」を促すためには、下記の3点が有効であることが明らかとなった。

- ① 自分なりの学びと納得感のあること・ものを生かすことの重要性
- ② 共感的な関わりと対話(子供の思いや願いに寄り添う)
- ③ 子どもの学びの文脈に沿った働き掛け

後期の授業づくり(作業学習)は、教師の期待する姿「他者の状況に注意を向け、言動を選択したり、他者と折り合いをつけたりする姿」に迫るための取組であった。前期の取組から見えてきた①自分なりの学びと納得感のあること・ものを手掛かりに、「花をプレゼントする」という学習活動について学部で検討し、下記の2点に重きを置いて実践を重ねた。

- ① 学びの見える化(自分がやったことや自分なりに思ったことや考えたことを抽象化したり、概念化したりして目に見える形にすること)→「笑顔ボード」「人を笑顔にするカボード」〈掲示物〉
- ② 他者との共感的な関わりと対話(意味付けと価値付け)
→「〇〇すると笑顔になる」「〇〇すると〇〇もうれしい(うれC)」という教師との関わり

単元の始めの頃には、花をプレゼントすることで「ぼくがうれしい」という思いを抱いていた事例生徒Bであったが、花を渡す→相手が笑顔になる→近くにいる教師がタイムリーに「花をプレゼントしたら〇〇先生も嬉しい」と意味付けるといふ一連の体験を繰り返すことで、「ぼくもうれしい、みんなもうれしい」という思いに変化した。また、今年度は、授業での学びを他の授業や日常生活場面に広げるため、学びを捉え直して本人の今に寄り添い、授業における体験(「〇〇するとみんなもうれしい」)を日常生活の様々な場面において繰り返し意味付けすることで、さらなる学びの蓄積を図った。それにより、授業で明らかとなったアプローチを学部で共有し、学校生活の様々な場面で働き掛けることができた。

創造を求められる美術科、仲間との協働的な関わりや誰かのためにという目的意識が求められる作業学習。始めは、どちらにおいても、「やりたい」という思いを引き出すことすら難しい状況であった。本人にとって納得感のあることやものを手掛かりに、活動内容やペア活動を設定したことで、あこがれの姿を思い描き、「こなす」から「こうしよう」という思いをもって取り組む姿へと変容した。これは、「物事への向き合い方や捉え方が変化」しつつあると捉えることができるだろう。

家庭では兄として、小学部の6年間は、年下の仲間から頼りにされる存在として、お兄さんの役割を担い育ってきたことから、「代表」「進行役」「リーダー」といった役割が好きで、自分事になりやすい。現状としては、「みんなが喜んでくれるから、ぼくがやろう」というよりは、「自分が教えてあげたい」「自分がしてあげたい」という思いが第一にあると推測できるが、次年度は2年生として活躍できる場面が増えそうである。

また、認知特性の得意なこととして「相手の言葉や表情をそのまま捉えて覚える」とある。作る→プレゼントをする→「〇〇すると、みんながうれしい」(教師との共感的な関わり)のように、自発的な言動と教師による共感的な関わりや対話をセットにし、体験として蓄積していくことで、いずれ本人にとって意味あることになると考えられる。教師が期待している「みんなのために〇〇したい」という思いをもって行動する姿が増えていくことを期待したい。

昨年度から2名の生徒を事例に挙げて子ども理解を深めてきたが、次年度においても、新たに1名の生徒を事例として取り上げ、その子なりの学びと納得感のあること・ものを丁寧に見取り、その子どもの文脈に沿った学びの形やアプローチの仕方について学部で検討していく。中学部でのすべての学びにおいて、子どもたち一人一人の「できた・分かった」や今の自分として「意味を見出せていること・ものや納得感のあること・もの」を生かした学習活動や役割を設定し、他者と協働的に学習課題を解決すること(個別最適な学びと協働的な学び)ができるよう、引き続き検討を重ねていきたい。